

「汽水文化」の提唱に向けて —— 共同研究の中間報告と今後の展望 ——

安 室 知
YASUMURO Satoru

はじめに

日本列島では、河川の河口部や後背湿地の潟湖また内湾といった沿岸環境の多くは淡水と海水が入り交じる汽水域となる。そこは、従来、塩水が混じり低湿なため、人が暮らすことのない不毛の地であり、そのため新田開発などにより克服されるべき悪地として位置づけられてきた。

しかし、そうした評価はおもに為政者の側からなされたものにすぎない。また為政者のために残された記録や統計に頼る歴史研究者の視点もそれにならうものであったことはいうまでもない。そこで、為政者や研究者の視点を離れ、現実にもそうした地域に暮らしてきた人の立場に立ったとき、どのように汽水域がみえてくるのか、新たな汽水像を描くことを、共同研究「水辺の生活環境史」の目的のひとつとした。

なお、本共同研究は、正式なタイトルを「水辺の生活環境史」としているが、それはおもに汽水と水上生活をテーマとする2班により構成されている。そのため、独立した共同研究として、汽水をテーマとするのは、2014年度から始まる次期研究プロジェクトからである。したがって、本稿は、あくまでも共同研究「水辺の生活環境史」における汽水班の中間報告として提出するものである。

具体的には、河川（江戸川・四万十川）および湖沼（潟沼）の汽水域を取り上げ、そこで営まれる漁撈活動の特徴を示す。また開発等により汽水環境がいかに変化し、またそのことが住民生活にどのような影響を与えたのかといったことについて民俗学的に考察する。

1. 汽水域とは何か

汽水とは、ひと言でいえば、海水と淡水が混合した状態をさす。当然海水よりも低塩分となる。自然科学分野において、汽水は、塩分濃度0.5～3.5パーミルの範囲とされる（財団法人河川環境管理財団編、2008）が、本共同研究会では住民の意識として海の影響を受ける淡水域および河川水等の淡水の影響を受ける海域を総称するものとする。その場合、それぞれ影響を受けることで民俗的に何らかの変化が生じていることを重視する。反対にいえば、住民の民俗文化形成において何ら影響がなければ、そこが塩分濃度が汽水の範疇にあったとしても、対象としては本研究では意味のある汽水空間とはいえない。したがって、本研究で定義する“汽水”は、あくまでも住民の意識を重視した生活空間とし、その意味で自然科学上の空間ではなく文化概念である。

周囲を海に囲まれる日本列島では、前述のように、河川が海に流れ出しつつも潮の逆流をみる河口部、また河川水が滞留しやすい内湾、および内陸にあっても河川を通じて潮の流入をみる後背湿地内の潟湖のような湖沼が汽水となる。自然条件によっても異なるが、河川では、数十キロメートル上流まで潮の流入をみるところもある。そうした河川において海の潮汐が影響する範囲をとくに河川感潮域という。この場合は、海水の河川上流への遡上はある程度定期的なものとなり、潮汐による毎日2回の変動とともに2週間を周期として大潮・小潮の変化もある（西條・奥田、1996）。また湖沼の場合は、海岸の自然堤防を挟んで海と接するところや河川を通じて潮の流入をみるところを汽水湖という。

汽水域には海水生物と淡水生物が入り混じり棲息するため、豊かな生物相が形成される。ただし、汽水を利用できるのは塩分濃度の変化に生理的に対応することが可能な生物に限られる。なかには好んで汽水環境に暮らす生物も存在する。とくに汽水環境に適応的な魚類を汽水魚という。汽水魚の場合、詳しくは後述するが、歴史的に人との関わりが深く、地域の民俗文化形成にとって大きな意味を持っている。また、アユのように通常は上流の淡水域に生活していても産卵のために河口部に近い汽水域まで下ってくる淡水魚もいる。アユの場合には、生活史の中で産卵および稚魚育成段階において汽水域を利用する魚類ということができる。

また、汽水域においては、完全に淡水と海水とが混じり合うのではなく、表層を真水（淡水）が、下層を鹹水（塩水）が流れて層になっている場合がある。河川河口部より上流において満潮時に潮の流入をみるときにそうした現象が起きやすい。そうした現象を利用して、たとえば佐賀平野のように、表層の真水だけをうまく稲作のための用水に利用する民俗技術を発達させているところもある。

2. 汽水域への注目 ― 民具研究との関わり ―

民俗学における汽水域への注目は、あるひとつの小さな民具をもって出発している。日本の民俗学にとって1930年代は、はじめて民具が体系的に研究されだしたときだといってよい。その意味で、1930年代は好事家的な関心を超えた近代科学、つまりモノの視点による民俗学および民具学の出発点と考えることができる。

そのとき最初に取り上げられた民具がウケ（筥）とアシナカ（足半）である。こうしたモノに関する体系的な研究は渋谷敬三がアチック・ミュージアム（後の日本常民文化研究所）を舞台に主導した。その記念碑的な研究成果として、アシナカについては報告書「いわゆる足半に就いて」にまとめられ刊行されたが、ウケの方は物の収集はおこなわれたものの結局のところ研究としてはまとめられることはなかった。

そのことに関して、河岡武春は「もし、この筥研究がまとまっていたら、その後の民具研究のあり方は相当変わったものになっていたと思われる」と述懐している（河岡、1975）。1970年代前半、河岡は漁獵師ともまた農民とも判別できないような生活のあり方について日本海側の海岸線に点在する潟周辺の低湿地に注目して調査を続けていた。そのとき、後に自ら提唱する低湿地文化における文化要素としてとくに注目していたのが、農なら低湿地稲作、獵なら水鳥獵、そして漁ならウケのような小型の定置性漁法であった。

その後、民俗研究および民具研究は、生業を農や漁、猟、諸職、商といった個々の生業技術を独立したものとして扱う方向性を強く持つようになっていった（安室、1998）。もしウケの研究がまとまっていれば、ウケが農民にも漁師にも用いられる漁具であり、さらにいえば漁師とか農民といった生業カテゴリーを超える、つまり河岡や辻井善弥が到達した「農漁民」という視点が研究の中心になりえたのではなかろうか（安室、2010）。少なくとも農や漁を単独で扱うような生業を単純化する方向での研究ではなく、生計維持に焦点を当てた複合生業といった研究方向がいち早く示されたと考えられる。

少なくとも1940年（昭和15年）前後においては、地域における生活の営みを個々の生業カテゴリーに分けてみることに疑問が存在していた。渋沢敬三はウケ研究の重要性を以下のように分かりやすく述べている。「小さい漁業としては、百姓が筌やブツタイのようなもので泥鰌などを獲っている漁業もある。それは如何にも小さく、まとまって居らぬので下らない漁業でありますけれども、日本全体から見ると馬鹿に出来ない。この筌というものが日本全体に何百万何千万個あるか解らない。従ってこの筌によって採取されているところの量というものも統計には出てこないが、非常に莫大なものに上るのかも知れない。」（渋沢、1941）。これは、当たり前のことがそれまで研究レベルにおいては対象化されてこなかったことについての、素直な疑問の表明である。民俗学や民具学をもとに、地域に暮らす人びとの目線に立つからこそ言いえたことであるといつてよかろう。

さらに、河岡は、渋沢同様、汽水域について、海面漁業と内水面漁業の接点としてとくに注目する（河岡、1976）。それはウケの問題にとどまらない。汽水を媒介に、内水面と海面との間を自由に行き来する人びととして「漁民」を想定する（この場合の「漁民」は、後に自身が提唱する「漁農民」と重なる）。そして、内水面漁業と海面漁業を截然と分けて考えることに異を唱える。その考え方は海と陸との接点に多くある低湿地（具体的には「潟」）へとつながる。

以上をまとめると、汽水域を海と陸また川との漸移帯とするなら、ウケは農と漁の漸移体と位置づけることができよう。

3. 河川の汽水域

(1) 潮と川漁

海に接しない埼玉県にあって、川漁師は海とはけっして無縁ではない。川を通して海とつながっているからである。そうした海の影響を川漁師は巧みに利用する知恵を持っていた。

埼玉県南部の三郷市を流れる江戸川や中川は、25キロメートルほど下流で東京湾に注いでいる（図1）が、潮の満ち引きの影響を受けて水位や水質が多様に変化した。江戸川に比べると、中川は潮の影響が大きく、満ち潮のときには流れが上流側に押し戻されるという。そうしたときには川の流れが滞り、中川やそれに通ずる用排水路の水質が悪くなる。

そのため、中川のコイやフナは臭みが強く、捕ってもあまり売り物にはならないとされた。そのかわり、中川はナマズの棲息には向いており、ナマズ漁を主体とした川漁師が中川近辺には暮らしていた。こうした潮の満ち引きの影響は、河川の上流部にダムが建設されてからとくに大きくなった。

潮の流れに乗って、東京湾から三郷あたりまで川を遡ってやってくる海の魚がいる。スズキ・ボ

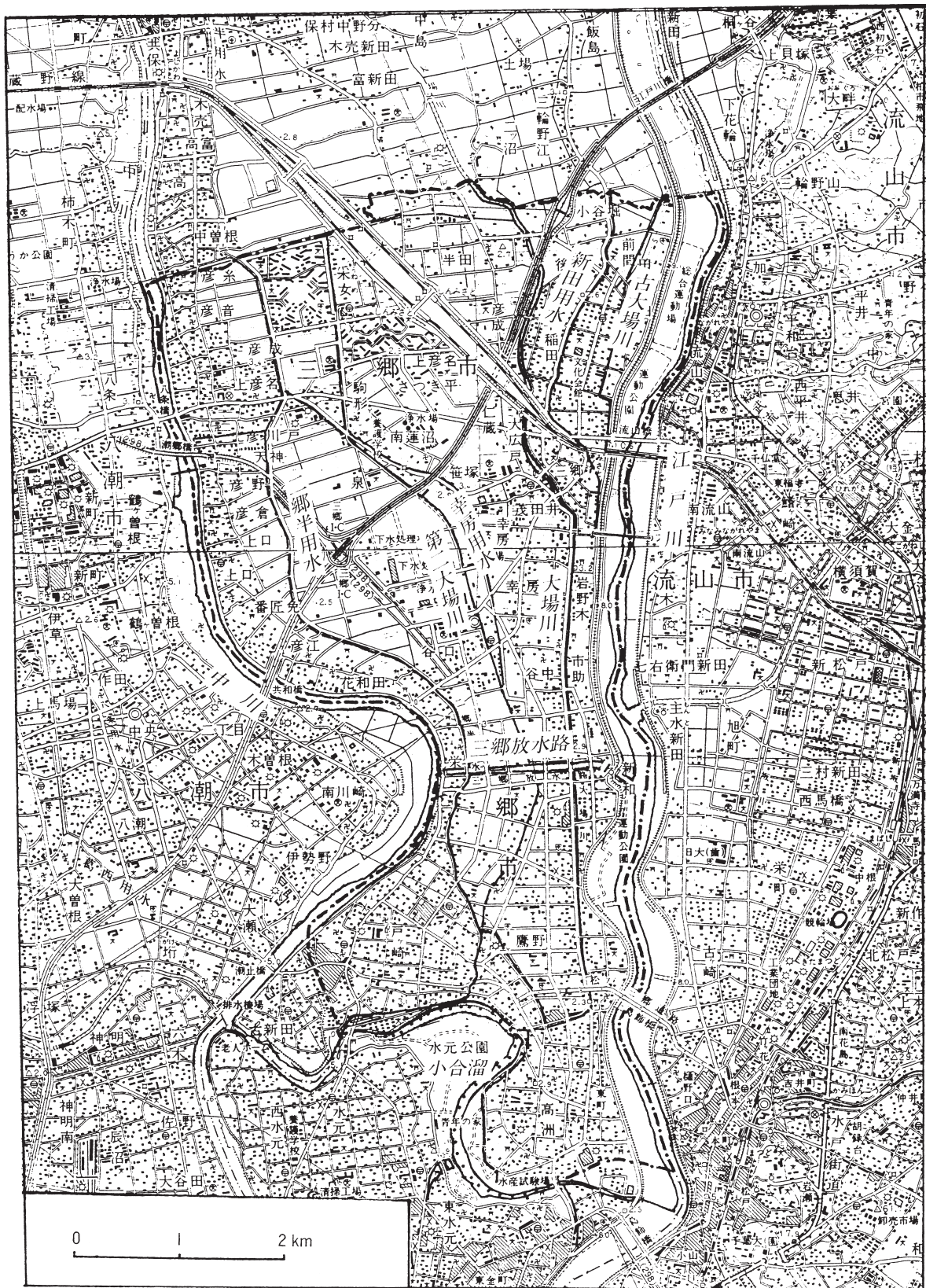


図1 江戸川下流域（三郷）の河川と水路

（『三郷市史8巻——別編自然編』より転載）

ラ・ハゼなどである。また、数こそ少ないが、かつてはサケも秋になると遡ってきた。そうした海魚のなかでも、とくにスズキは美味とされ、売るためというよりは漁師自身が食べるために捕っていた。また、三郷では通常、ボラは漁の対象にはならない。しかし、秋になり目玉の白くなったボラは脂がのって美味しいとされ、ボラ漁もそうした時期におこなわれた。

また、潮の干満を利用して川漁師はいくつかの漁を考案している。たとえば、中川は三郷の上流側にある吉川市近辺まで潮の干満の影響を受けるが、それを利用して三郷市彦成地区の干潟では4月から9月にかけてケイツケ漁がおこなわれる。長さ30メートルほどの干潟のまわりに、高さ1.5メートルほどの細い丸太を3メートル間隔に打っていき、そこに網を張りめぐらせる。網には、1か所だけ出口が設けられており、そこにウケと呼ぶ袋網の仕掛けを作っておく。そうすると、満ち潮に乗ってやってきた魚が干潮とともに下流へ戻ろうとすると、自然とウケの中に入ってしまう（鈴木、1991）。

（2） 漁場としてのヨシヤッカラ

潮の影響を受ける川辺や河川敷の池沼のまわりには広大なヨシ場などの低湿地があった。そこは、水の制御が難しく、また些細な水位変動でも水に浸かってしまうため、人には利用しづらい空間とされてきた。とくにそこを乾田化することは、近代的な土木技術が発達する以前においては、きわめて困難なことであった。

しかし、反面、淡水漁撈や水鳥の狩猟の場としてみた場合、そこは好条件を備え、そうした低湿地に暮らす人びとにとっては重要な生業の場となっていた。三郷の場合、そうした場のひとつに、現在は公園や野球場となっている河川敷がある。とくに江戸川の河川敷は広大である。

川の増水に伴い、江戸川の河川敷は一転して漁場に変化する。主として4月から夏にかけての時期である。河川敷に公園や野球場が作られる以前は、江戸川の岸辺はヨシや水草が生い茂るヨシ場であった。そうしたヨシ場をヨシヤッカラまたはヤッカラと呼んでいた。

そうした川岸のヨシ場に水がつくと、このときとばかりに魚がやってくる。とくに、コハタキ（産卵）の時期は、いっせいにコイやフナがヨシヤッカラへ産卵の場をもとめてやってきた。そのときに漁においては最大の好機となる。

そうすると、普段は中川で漁をする川漁師も江戸川にやってきたし、さらには農家の人たちも大勢魚捕りにきた。浅いヨシヤッカラにやってきた魚は特別な技術や専門的な道具がなくても捕れるからである。農家の人はオッカブセ（魚伏籠）のように、それほど専門の技術を必要としない漁具で魚捕りをした。そのとき、川漁師は、人の多くいるヨシヤッカラの浅瀬を避け、舟に乗り、オッカブセができなくなる水深3尺（約1メートル）以上のところへ行ったら、投網を打って魚を捕った。使いこなすには技術を必要とする投網は、かつては川漁師以外は持つことはなかった漁具である。

また、かつてヨシヤッカラの中には点々とイケ（池沼）が存在した。イケには、自然のもののほかに、河川改修時に堤防を補強するため土を採った跡に水が溜まったものも多くあった。こうしたイケは大広戸地区などにみられる灌漑用の池に比べるとはるかに規模が大きい。こうしたヨシヤッカラに点在するイケでは、おもに減水期に入る秋から冬にかけて魚捕りがおこなわれる。イケにはデミズ（出水）の度に魚が入るため、いつでもたくさんの魚がいるとされた。

このイケでは、水の減り具合に応じて、いくつかの漁法が選択的におこなわれる。秋、水の減り始めの頃は、オシアミ（押し網）を使って漁をする。ヨシを刈りとしては、そこをオシアミですくう。さらに水が少なくなると、カイボリをして魚を一網打尽にすることができる。カイボリは、イケに残る水をカイオケ（掻い桶）やバーチカルポンプを用いてすべて掻き出し、中に残る魚を一網打尽にするものである。こうしたヨシヤッカ内での漁は、漁業権に関係なく、どこでおこなってもよいとされた。

4. 湖沼の汽水域

(1) 汽水湖としての涸沼

涸沼は茨城県の太平洋岸のほぼ中央に位置する汽水湖である（図2）。湖水面積9.35平方キロメートル、湖岸延長20キロメートル、平均水深2.1メートル（最大水深6.5メートル）。那珂川の堆積作用によりできた海跡湖である。太平洋に近く、潮の干満の影響を受け、約6時間おきに潮の流入を受ける。そうした潮とともにハゼ・ボラ・クロダイ・イワシ・ニシンといった海産魚が涸沼から太平洋に流れ出る涸沼川を遡ってくる。

そのため淡水魚のほか海の魚も多く、涸沼には全体で105種もの魚類が棲息している。古くからコイ・フナ・ウナギ・スズキ・クロダイなどの魚類のほか、貝類の好漁場として知られる。とくにシジミはかつて全国4番目の生産量を誇っており、当時は松川シジミの名称で築地市場においてブランド

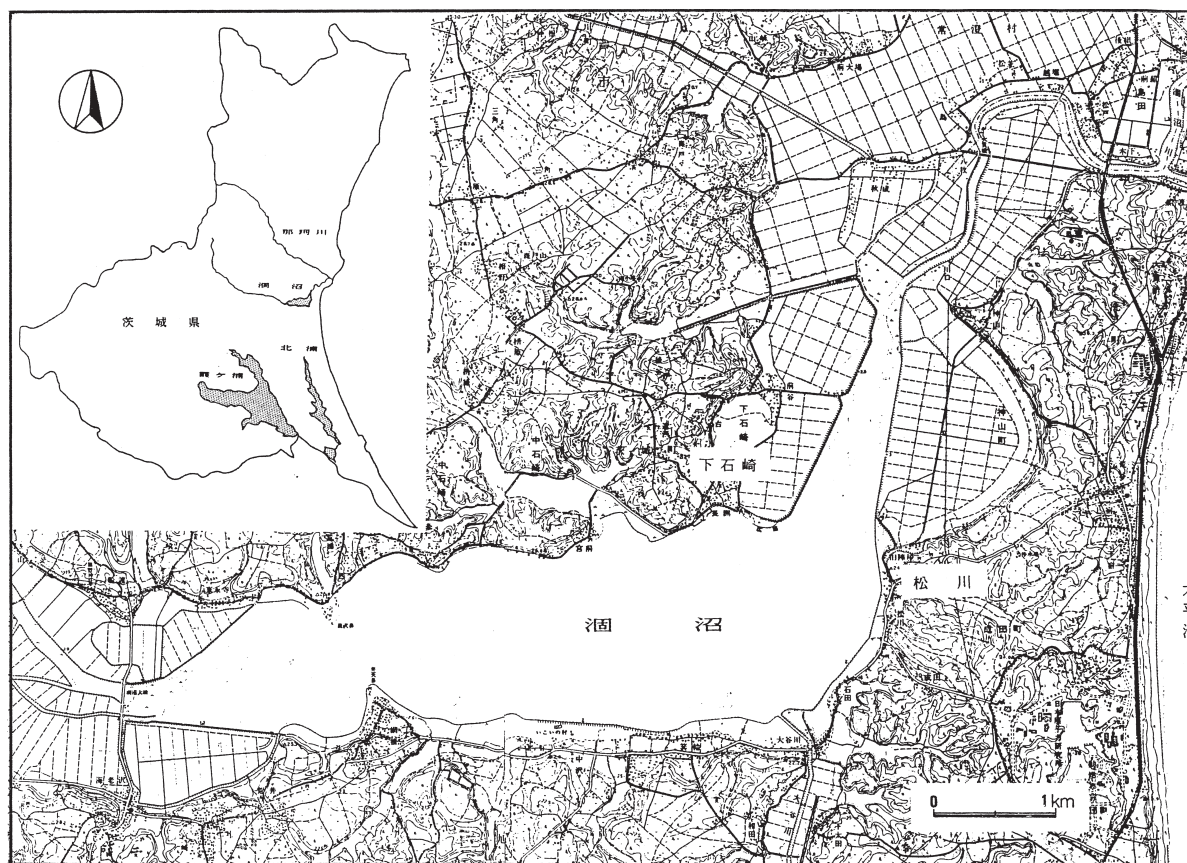


図2 涸沼の位置（国土地理院5万分1地図より作成）

化されたこともある。

涸沼の中でも涸沼川の流入口に当たる地域（涸沼西部）と涸沼川の流出口に当たる地域（涸沼東部）にはヨシやモク（藻）の繁茂する浅堆地が広がっている。このうち涸沼東部は、潮の逆流により土砂が十分に涸沼川に排出されないため、とくに浅く広い浅堆地になっていた。そうした浅堆地には、潮が引いたときには島のように陸地化するセガタ（瀬潟）がところどころにできる。セガタでは江戸時代から近代に至るまで干拓による新田開発がおこなわれてきた。

また、汽水域に特徴的で、かつ暮らしに関係深いものとしては、バチ（環形動物のゴカイ類）がある。バチは、通常は沼底の泥中に棲息するが、春先に強い南西風が吹くと、バチヌケといって、生殖のため泥穴からいっせいに水中に泳ぎ出る。水中に出たバチは引き潮に乗って海に出ようとするが、それを食べるに海から魚がいっせいに涸沼に遡ってくる。また、この時期、人もバチを網ですくい捕り、畑の肥料とした。

(2) スマキ漁の発達

汽水湖たる涸沼に伝わる特徴的な漁法にスマキがある。竹で編んだ簀を湖上に立てめぐらせて建造する。スマキの呼称はその形態から付けられたもので、漢字を当てるなら簀巻ということになる。スマキは定置性迷入陥穽漁法の一種で、いわゆる琵琶湖のエリ（魼）と同様のものである。その特徴は内水面漁撈としては世界で最大級の規模にある。涸沼においても全長 100 間（180 メートル）に及ぶものがかつて作られており、もちろん涸沼の中では最大規模の漁法である（図 3）。

伝承の上では、涸沼においてスマキの歴史がもっとも古く、また今までにもっとも大型（全長 100 間）のスマキが建てられたところが松川である。同時に、涸沼の中で最後までスマキが残ったのも松川である（図 2）。

松川でのスマキの起源については、江戸時代に「殿様」から「松川六十三戸」に権利が与えられたという伝承がある。その事実関係は不明である。また、スマキの技術を涸沼へ伝えた先としては、仙台あたりの湖沼からとか北浦からなど諸説がある。ただし、北浦や霞ヶ浦にみられる定置性迷入陥穽漁具は、琵琶湖のエリと同様に岸边に基点を設けて、そこから水面に傘を広げた形のいわゆる突き出し型であり、涸沼でスマキを建てていた人たちは北浦や霞ヶ浦のものとは建造の手口がまったく異なるとする。その違いを生み出す最大の要因が、涸沼を汽水域にしている潮の定期的な流入にある。

図 4 に示した通り、スマキは涸沼川の流出口の付近に広がる水深 2 メートル以下の浅堆地に集中して見られた。1920 年代後半、涸沼には全部で 28 か統のスマキが有ったといわれるが、上記の浅堆地

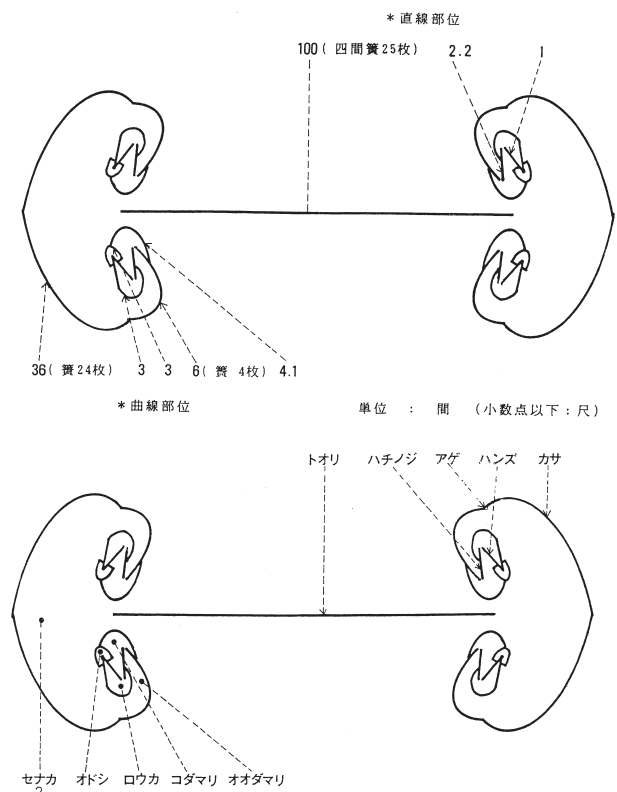


図3 スマキの各部位の名称と規模

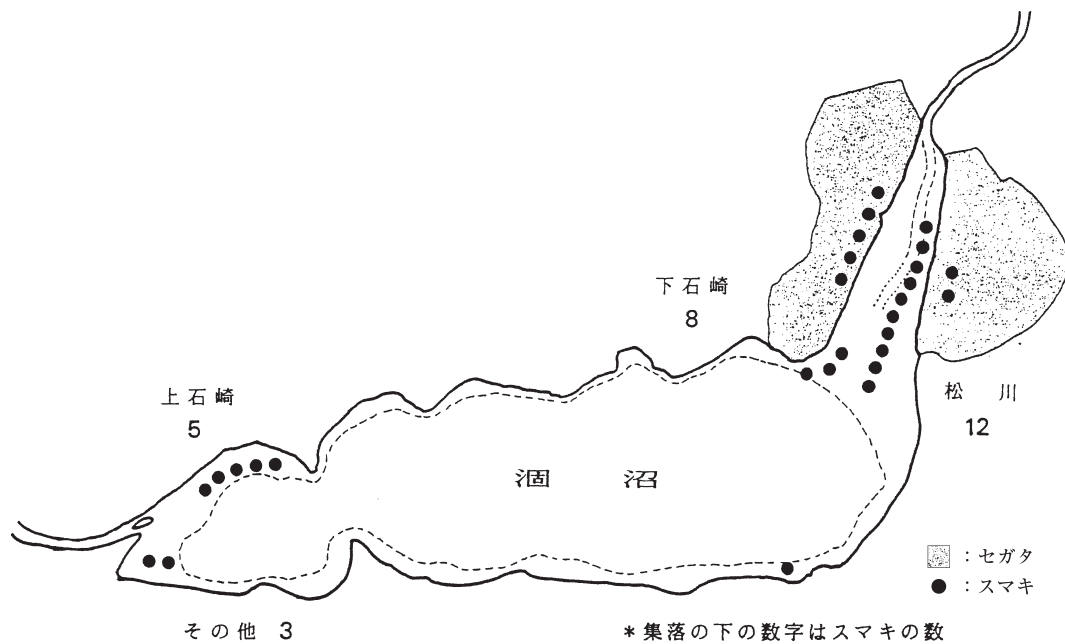


図4 スマキの行われた場所——昭和初期——

に面して立地する松川に12か統と下石崎に8か統が存在した。

こうした浅堆地の特徴は、浅く平らであるというだけでなく、海の干満の影響により、6時間おきに潮の上り下りがあることが挙げられる。海の魚はその潮の流れに乗りやってくる。そうした魚を潮をうまく受け止めるようにスマキを建てて迷い込ませるわけである。トオリをはさんで両側に捕魚部が存在するという構造をなすのは魚の上りと下りの両方に対応するためである。

(3) スマキと潮

スマキが多く分布する涸沼川流出口（涸沼東部）は、潮の干満の影響を受け「塩水半分」といわれる状態にある。その浅堆地の流心部に強い潮流の行き来する一本の筋がある。それをミオ（湊）と呼ぶ。ミオは涸沼川の延長線上に浅堆地を突っ切るように流れており、回りの浅堆地に比べると一段深

くなっている。これがスマキにとっては大きな意味を持っている。

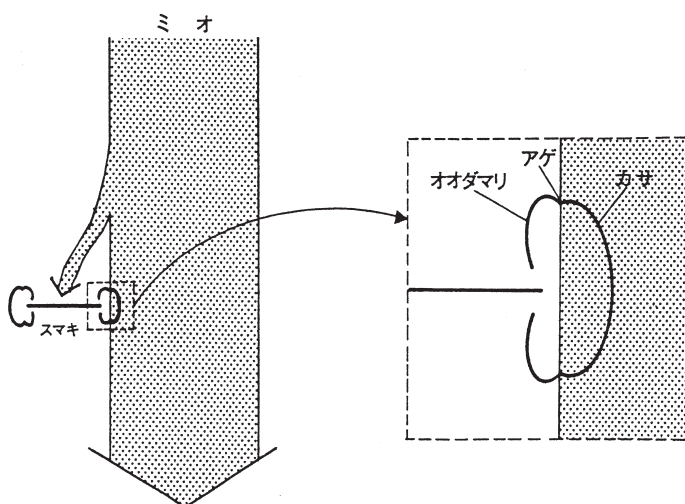


図5 スマキをミオに掛けて建てる技術——潮の呼び込み——

スマキは通常は3～7尺（90～210センチメートル）ほどの水深のところに建てるが、より高度になると、ミオの支流をうまく受け止めるように建てる（図5）。ミオの流れの一部を受けることにより、より多くの海産魚の漁獲が期待される。この場合、ミオの支流を受け止めるようにしてスマキの方向（角度）を決める。

また、スマキ建てに長けた人になる

と、図5にあるように、スマキのカサの部分をミオに少し掛けることにより、ミオからの分流を半ば人工的に作り出し、それをスマキに呼び込むこともできた。ただし、ミオ自体にスマキの本体を掛けることは禁止されている。また、実際は禁止されるまでもなく、ミオの流心を流れる強い潮を、スマキのトオリで直接受け止めることはとうてい無理であるという。

もうひとつスマキと潮の関係で忘れてはならないのは、その形態が潮により大きく規定されている点である。涸沼は干満の影響を受け6時間ごとに潮の流れる方向が180度変わる。そうした6時間ごとに方向の変わる潮流に対応する形として、定置性迷入陥穽漁法としては一般的な形態である突き出し型をとらず、傘の内側を向き合わせたようなスマキ独特の形（抱き合わせ型）になっている。潮の上りにも下りにも対応するように、左右対称でしかも両側に2か所ずつ、やはり対称形をなすように捕魚部のオドシが設けられているのはそのためである。この形態はたとえば琵琶湖ではサカサガケ（逆さ掛け）といって、ごく例外的な場合を除き、けっしてやってはいけないものとされている。

5. 汽水域と現代的課題

(1) 四万十川の特産品——アオサとアオノリ——

四万十川は日本に残された数少ない清流として全国的に知られる。しかし、川をめぐる人びとの暮らしや、川そのものがたえず変化を繰り返してきていることはあまり知られていない。四万十川はたえず人により利用されてきたし、現在まで「自然」のまま残されてきたわけではない。むしろ清流として喧伝される四万十川であるからこそ、今も昔も環境問題の最前線にあるといえてよい。地元漁師に聞いた四万十川汽水域をめぐる近年の変化は、生活者の目線で環境問題を考えるとき示唆に富んだものとなる。

四万十川の川の恵みとしてアオノリとアオサは全国的に有名である。一般にはアオノリと一括されてしまうことの多いアオサとアオノリ（スジアオノリ）を四万十川の漁師はきちんと分けて認識している。生物分類上も、アオノリはアオサ科アオノリ属に属し、アオサ科アオサ属のアオサとは別種である。近年そのアオサとアオノリの漁獲について対照的なことが起きているという。

アオサは四万十川河口付近の汽水域が主たる漁場で、1月中頃から4月末までが収穫期となる。かつては天然のアオサがたくさん採れていたが、1959年（昭和34年）頃に三重県の伊勢湾漁連が四万十川河口域に漁場を借りてアオサ養殖を始めると様相は一変する。その後、アオサは養殖物が主となり、四万十川の地元漁師も養殖をおこなうようになる。昔からアオサは伊勢湾が主産地として知られるが、30年ほど前に起きたいわゆる四万十川ブーム以降、四万十川のアオサは伊勢湾以上に有名となり、3年前には地域ブランドとしても登録されている。このように、現在四万十川で生産され出荷されるアオサのほとんどは養殖物であり、それは高度経済成長期に伊勢湾からもたらされた技術によるものである。

それは四万十川の汽水域に暮らす人びとが主体的に選択した変化であり、一種の生業戦略であるといえてよい。厳密に言えば、栽培種の増大による生態系の攪乱ともいえる現象であるが、当然それは環境改変とは地元では受け止められてはいない。それはとりもなおさず、川と深く関わり、そこを生活の場としてきた地元住民が主体的に選択したものだからである。ただし、そうした選択の是非は、

畢竟、川は誰のものか（地元の漁業者だけのものか）といったことと関わり、立場や関わりの度合いにより判断のわかれるところであろう。国民的関心を集める四万十川だけに、その問題の意味することは大きい。

そうしたなか、四万十川の汽水域には、この3年ほどの間に地元漁師の意図しない大きな変化の波が押し寄せている。それは漁師が生活の中に捉えた環境問題であり、その指摘は重要な意味を持つ。それは具体的には四万十川河口に存在した砂州（通称、ヨコハマ）の消失により引き起こされた。そこを生活や生業の場としてきた漁師の認識では、砂州の消失は決して自然現象ではない。

その影響をもっとも受けたのが、アオサと並んで四万十川汽水域の産物であったアオノリである。むしろブランドとしては四万十川のアオノリの方がアオサよりも有名であり、四万十川河口域は日本における主産地とされてきた。そのアオノリが本来なら12月になると採集時期となるが、2009年以降はまったくといってよいほど採れない。その主たる原因がヨコハマの消失であり、そしてそれを引き起こしたのが2008年に完成した600メートルに及ぶ突堤であるというのが漁師の主張である。

(2) 汽水域変化のきっかけ

四万十川河口にはちょうど川と海とを隔てるようにヨコハマ（横浜）と呼ばれる砂州が伸びてい

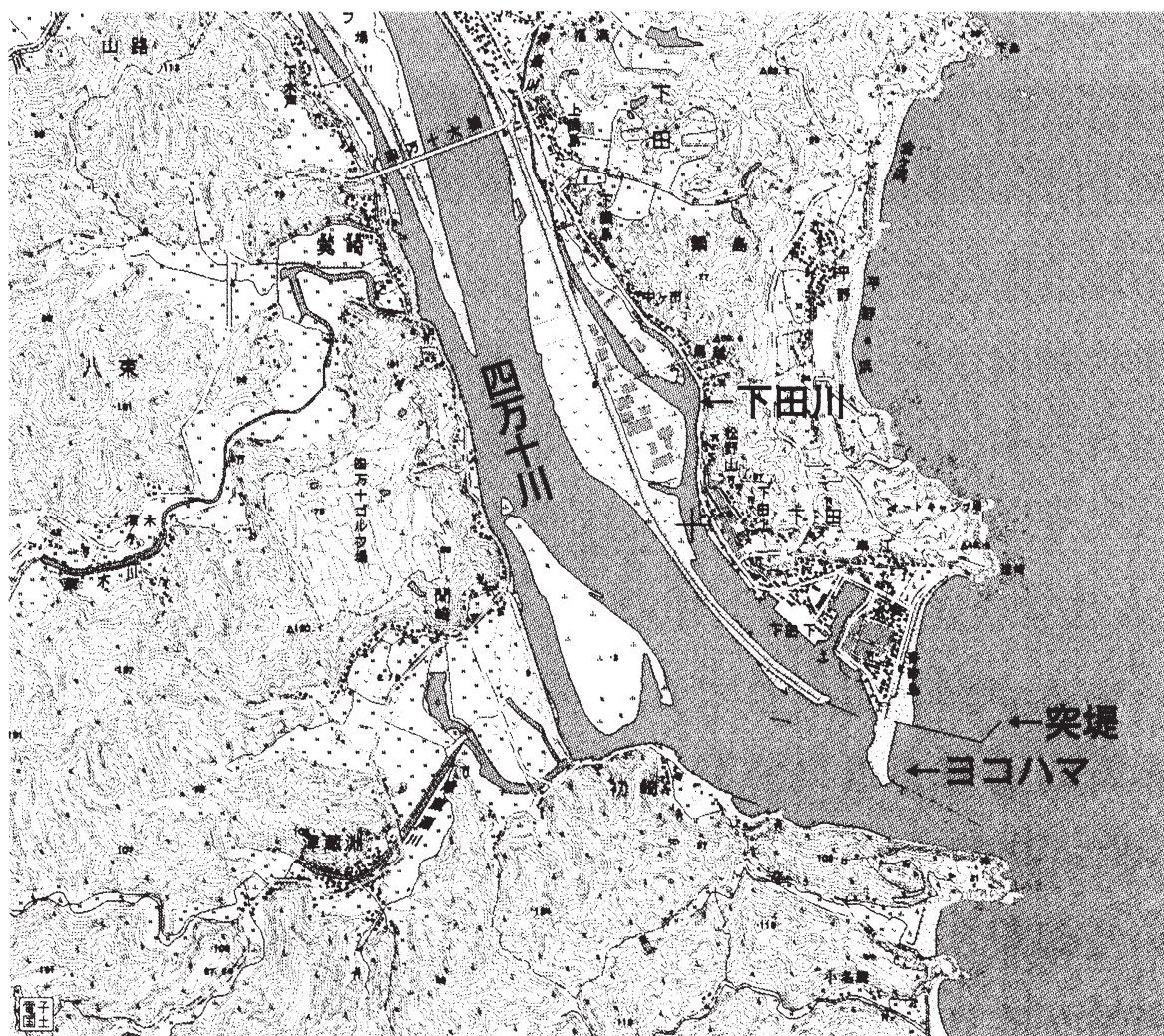


図6 四万十川河口（国土地理院 旧2万5千分1電子国土基本図より作成）

た。それは図6にあるように、川の出口を半分ほど塞ぐように張りだしていた。その重要性は、それがなくなってはじめて漁師により認識されたといつてよい。

四万十川は河口部において下田川と合流する。その合流部にできた入江が下田港として利用されている。四万十川からの洪水を防いで下田港をより安定したものとするため、下田川の河川改良と併せて、河川と港口との分離を目的に600メートルに及ぶ突堤が建設された。2008年のことである。これは高知県の土木事業としておこなわれたものである（事業全体としては2013年まで続く一大プロジェクト）。突堤はヨコハマの付け根あたりから海に突き出すように建設されたが、それにより北東方向からやってくる沿岸流が遮断されることになる。

その結果、砂州（ヨコハマ）が消失したとされる。沿岸流が突堤により阻まれると、河口部に形成されていた砂州は四万十川の流に抗しきれず、押し流されてしまったのである。もともとヨコハマは台風などが来るとその激しい波で一時的に消失することはよくあった。しかし、そうした場合にはまた2・3日もすると元に戻っていた。沿岸流の働きによるものである。そのようにヨコハマは緩やかに海と川を遮断する役目をはたしていた。しかし、2008年に突堤が作られて以降は、ヨコハマは消失したまま元に戻ることはなくなった。それは近年撮影された衛星写真によっても確認できる。

数年かけて突堤は沖の方から順に作られていったが、最後に岸と結ばれることで完全に沿岸流が遮断された。それまでは潮が通っていたためヨコハマは保たれていたが、最後に岸と結ばれて突堤が完成するとヨコハマがみるみるうちに姿を消していったという。それを根拠に、四万十川の河口部を主漁場とする漁師たちは高知県に対して突堤建設とヨコハマの消失の因果関係を説明した。突堤の影響で砂州が消失したとする漁師側の主張は後には県にも認められることになる。

しかし、問題はヨコハマの消失にとどまらない。それ以降、四万十川河口部の汽水域ではさまざまなところで漁が不振に陥っているのである。ヨコハマの消失と漁業不振との関係は、いまのところまだ公的には認められておらず、当然、漁業補償の対象にもなっていない。

（3）汽水域の変化と漁業

漁師の主張では、突堤ができる以前、つまりヨコハマが河口を塞ぐように緩やかに川と海とを隔てていたときには、川への潮の流入は緩やかで、したがって川水（淡水）と海水（鹹水）とは緩やかに混じり合って四万十川河口部には広大な汽水域が形成されていた。その広大な汽水域は、アオサやアオノリといった緑藻だけでなく、アユをはじめ、エビ、カニ、ゴリ、アカメなど多くの魚が生育する場所として重要であった。そうした汽水環境が大きく変わることによって、これまで普通に営まれてきた漁にさまざまな影響が出てきている。

1950年（昭和25年）代初めの頃までは、河口から7・8キロメートル上流ではアユの地引網がおこなわれていたが、現在そこではアユに代わってイワシが捕れるようになっている（同様に四万十川最大の魚類であるアカメも今では海水魚のイシナギといっしょに見られるようになった）。それはヨコハマが失われて潮が河口から8キロメートルほど上流のところにまで上るようになったためである。アユの産卵場（アユは汽水域に下ってきて産卵する）はそれほど位置が変わっていない（それでも3・4キロメートルは上流に移動している）ことを考えると、イワシが7・8キロメートル上流にまでやってくるということは、海水と川水とがゆっくりと適度に混じることで作られてきた汽水域の様

相が大きく変化していることを示している。適度な汽水環境にあった河口域は、より塩分の強い水域になってしまった。しかもヨコハマがなくなったため海から急激に潮の流入をみるようになったといえる。まさに漁師が言うように、突堤の建設により「河口は汽水ではなく海の入江」になってしまったのである。

そのため、2009年以降、四万十川では河口部から10キロメートルあたりまでのアユの漁獲量は極端に減った。アユの漁は夏場が最盛期である。それ以外にも、例年10月15日になるとアユはトメカワ（止め川）つまり禁漁となるが、4・5年前まではトメカワの前には河口から10キロメートルくらいのところでアユがよく捕れた。また、12月1日はオチアユ（落ち鮎）の解禁日だが、その日以降もやはりアユがよく捕れていた。こうして断続的ではあるが、ほぼ1年を通してアユを漁獲できていた。しかし、ヨコハマが失われて以降はまったく漁にはならなくなり、どうにか自家消費分を手に入れるのがやっとの状態であるという。

突堤が作られヨコハマが失われることで汽水環境が大きく変わるようになったが、その結果として、多くの魚の棲息域が影響を受けることになった。しかも、それは淡水魚だけでなく海水魚を含むさまざまな稚魚の生育場所となる汽水域での出来事であるだけに、川の漁にとどまらず、今後は海への影響も計り知れないと漁師は予測する。それが現実のものにならないことを祈念したいし、そうした状況に陥る前に早めの対策が必要となってこよう。その問題提起はすでに地元漁師によりなされている。

この事例は、四万十川河口域の場合、砂州が失われる前後を比べても汽水域であることに変わりはないが、1本の突堤ができたことで汽水の様相が変化し、そのことが住民生活に多大な影響をもたらしたことを示している。巨視的には不変の汽水域であっても、微視的には潮の流入の具合や塩分の混じり方などが変化することで汽水域の持っている住民生活上の価値は大きく変化することが分かったといえよう。汽水域の民俗をみるとときには、より微細な視点が必要なことをこの事例は教えてくれている。

おわりに

本稿はまだ中間報告の段階であるが、これまで論じてきたように、汽水域に暮らす生活者の立場に立ってみると、これまでの汽水像とは違ったものがみえてきた。水利や土地条件という点でいえばたしかに悪条件にみえても、そうした悪条件を巧みに利用する民俗技術が存在すること、また悪条件だからこそ独自の民俗文化が形成されてきたことがわかった。

たとえば、淡水魚とともに海水魚が棲息する汽水域ではその生産性の高さを利用する独特な漁撈技術が発達する。また、水の制御がままならないからこそ、それに順応したかたちでの低湿地農耕がみられた。さらに、そこは海から河川へまたその反対に、荷の積み替えがおこなわれるなど水上交通の要地ともなっており、歴史的には市や宿場の登場といった都市化への胎動ともとれる現象がみられた。

次期共同研究では、汽水域独特の文化要素を繋ぎ合わせ、日本列島の生活環境史として総合化することで、生活者の視点に立った汽水像を描き、「汽水文化」を提唱することを目的としたい。

引用参考文献

- 河岡武春 1975 「渋沢敬三と筌と足半」『日本民俗学』99号
- 河岡武春 1976 「低湿地文化と民具（1）（2）——新潟県蒲原地方を中心として——」『民具マンスリー』9巻3・4号
- 西條八束・奥田節夫編 1996 『河川感潮域——その自然と変貌』名古屋大学出版会
- 財団法人河川環境管理財団編 2008 『河川汽水域——その環境特性と生態系の保全・再生』技報堂出版
- 渋沢敬三 1954 「所感——昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会にて——」『祭魚洞襍考』（『渋沢敬三著作集第1巻』平凡社、1992年、所収）
- 渋沢敬三 1961 「いわゆる足半に就いて」『犬歩当棒録』（『渋沢敬三著作集第3巻』平凡社、1992年、所収）
- 鈴木由蔵 1991 「二合半領 四季の魚取り」『葦のみち』3号
- 三郷市史編さん委員会編 1991 『三郷市史第8巻——別編自然編——』三郷市
- 安室知 1998 『水田をめぐる民俗学的研究——日本稲作の展開と構造』慶友社
- 安室知 2010 「『農漁民』は『半農半漁』を超えられるか」『ニューズレター 非文字資料研究』24号
- 安室知 2012 「汽水域の漁撈——涸沼のスマキ——」『ニューズレター 非文字資料研究』28号
- 安室知 2013 「消えたヨコハマ——四万十川漁師がとらえた環境問題——」『ニューズレター 非文字資料研究』29号